

法華經第五の卷安樂行品に云はく「文殊師利、此の法華經は無量の国の中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず」云云。此の文の心は、我等衆生の三界六道に輪回せし事は、或は天に生まれ、或は人に生まれ、或は地獄に生まれ、或は餓鬼に生まれ、畜生に生まれ、無量の国に生をうけて、無辺の苦しみをうけてたのしみにあひしかども、一度も法華經の国には生ぜず。たまたま生まれたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず。となふる事はゆめにもなし。人の申すをも聞かず。

仏のたとへを説かせ給ふに、一眼の亀の浮木の穴に値ひがたきにたとへ給ふなり。心は大海の中に八万由旬の底に亀と申す大魚あり、手足もなくひれもなし。腹のあつき事はくろがねのやけるがごとし。せなかのこうのさむき事は雪山ににたり。此の魚の昼夜朝暮のねがひ、時々刻々の口ずさみには、腹をひやし、こうをあたゝめんと思ふ。赤梅檀と申す木をば聖木と名づく。人の中の聖人なり。余の一切の木をば凡木と申す。愚人の如し。此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり。あはれ此の木にのぼりて腹をば穴に入れてひやし、こうをば天の日にあてゝあたゝめばやと申すなり。自然のことはりとして千年に一度出づる亀なり。しかれども此の木に値ふ事かたし。大海は広し、亀はちいさし、浮木はまれなり。たとひ、よのうきゞにはあへども梅檀にはあはず。あへども、亀の腹をえりはめたる様に、がい分に相應したる浮木の穴にあひがたし。我が身をち入りなばこうをもあたゝめがたし。誰か又とりあぐべき。又穴せばくして腹を穴に入れえずんば、波にあらひをとされて大海にしづみなむ。たとひ不思議として梅檀の浮木の穴にたまたま行きあへども、我一眼のひがめる故に、浮木西にながるれば東と見る故に、いそいでのらんと思ひておよげば弥々とをさかる。東に流るを西と見る。南北も又此くの如し云云。浮木にはとをさかれども近づく事はなし。是くの如く無量無辺劫にも一眼の亀の浮木の穴にあひがたき事を仏説き給へり。

此の喩へをとりて法華經にあひがたきに譬ふ。設ひあへども、となへがたき題目の妙法の穴にあひがたき事を、心うべきなり。大海をば生死の苦海なり、亀をば我等衆生にたとへたり。手足のなきをば善根の我等が身にそなはらざるにたとへ、腹のあつきをば我等が瞋恚の八熱地獄にたとへ、背のこうのさむきをば貪欲の八寒地獄にたとへ、千年大海の底にあるをば我等が三悪道に墜ちて浮かびがたきにたとへ、千年に一度浮かぶを

ば三悪道より無量劫に一度人間に生まれて釈迦仏の出世にあひがたきにたとう。余の松の木松ひの木松の浮木にはあひやすく梅檀にはあひがたし。一切経には値ひやすく、法華経にはあひがたきに譬へたり。たとひ梅檀には値ふとも相応したる穴にあひがたきに喩ふるなり。設ひ法華経には値ふとも肝心たる南無妙法蓮華経の五字をとなへがたきに、あひたてまつる事難のかたきにたとう。東を西と見、北を南と見る事をば、我等衆生賢かしがほに智慧有る由をして、勝を劣と思ひ劣を勝と思ふ。得益なき法をば得益あると見る、機適にかなはざる法をば機にかなう法と云ふ。真言は勝れ法華経は劣り、真言は機にかなひ法華経は機に叶はずと見る是なり。

されば思ひよらせ給へ。仏、月氏国に出でさせ給ひて一代聖教を説かせ給ひしに、四十三年と申せしに始めて法華経を説かせ給ふ。八箇年が程、一切の御弟子みな皆如意宝珠のごとくなる法華経を持ち候ひき。然れども日本国と天竺とは二十万里の山海をへだてゝ候ひしかば、法華経の名字をだに聞くことなかりき。釈尊御入滅ならせ給ひて、一千二百余年と申せしに漢土へ渡し給ふ。いまだ日本国へは渡らず。仏滅後一千五百余年と申すに、日本国の第三十代欽明天皇と申せし御門みかどの御時、百济国くだらより始めて仏法渡る。又上宮太子と申せし人、唐土より始めて仏法渡させ給ひて、其より以来今に七百余年の間、一切経並びに法華経はひろまらせ給ひて、上一人より下万人に至るまで、心あらむ人は法華経を一部、或は一巻、或は一品持ちて或は父母の孝養とす。されば我等も法華経を持つと思ふ。しかれども未だ口に南無妙法蓮華経とは唱へず。信じたるに似て信ぜざるが如し。譬へば一眼の亀のあひがたき梅檀の聖木にはあいたれども、いまだ亀の腹を穴に入れざるが如し。入れざればよしなし、須臾しゅゆに大海にしづみなん。我が朝七百余年の間、此の法華経弘まらせ給ひて、或は読む人、或は説く人、或は供養せる人、或は持つ人、とうまぢくい稲麻竹葦よりも多し。然れどもいまだ阿弥陀の名号を唱ふるが如く南無妙法蓮華経とすゝむる人もなく唱ふる人もなし。一切の経、一切の仏の名号を唱ふるは凡木にあうがごとし。未だ梅檀ならざれば腹をひやさず、日天ならざれば甲をもあたゝめず。但目をこやし、心を悦ばしめて実なし。華さいて菓なく、言のみ有りてしわざなし。

但日蓮一人ばかり日本国に始めて是を唱へまいらす事、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華経と是を唱ふる事は一人なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁よの者なり。念仏かたうどの方人は有縁なり、高貴なり。然れども師子の声には一切けものの獣声を失ふ。虎の影には犬恐る。日天東に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華経のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華経の声

出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのごとし。譬へば鷹たかと雉きじとのひとしか
らざるがごとし。故に四衆とりどりにそねみ、上下同じくにくむ。讒人国ざんにんに充滿して
奸人土かんじんところに多し。故に劣を取りて勝をにくむ。譬へば犬は勝れたり師子をば劣れり、星
をば勝れ日輪をば劣るとそしるが如し。然る間邪見の悪名世上に流布し、やゝもすれば
讒訴ざんそし、或は罵詈めりせられ、或は刀杖の難被をかふる。或は度々流罪にあたる。五の巻の経
文にすこしもたがはず。さればなむだ左右の眼にうかび、悦び一身涙にあまれり。

こゝに衣は身をかくしがたく、食は命をさ支へがたし。例せば蘇武そぶが胡国にありしに、
雪を食として命をたもつ。伯夷はくいは首陽山しゅようざんにすみし、蕨わらびををりて身をたすく。父母にあ
らざれば誰か問ふべき。三宝の御助けにあらずんばいかでか一日片時も持つべき。未だ
見参にも入らず候人の、かやうに度々御をとづれのはん侍べるはいかなる事にや、あやし
くこそ候へ。法華經の第四の巻には、釈迦仏凡夫の身に入りかはらせ給ひて、法華經の
行者をば供養すべきよしを説かれて候。釈迦仏の御身に入らせ給ひ候か、又過去の善根
の催もよをしか。竜女と申す女人は法華經にて仏に成りて候へば、未代に此の經を持ちま
いらせん女人をま守ぼらせ給ふべきよし誓はせ給ひし其の御ゆかりにて候か、貴し貴し。

三月二十六日

日 蓮 花 押

松野殿後家尼御前御返事